

【入選】「給食から学んだこと」

桜井小学校 石川 葵惟

「やったあ。今日はビビンバだ。」

そんな声が次々と耳に入ってくる。ぼくにとってもビビンバは、好物のメニューのひとつだ。肉がジューシーで、それをちょうどよくおさえる卵がお米に合うこと。今日の気分は最高だ。

「いただきます。」

その言葉と同時に、ぼくは目にもとまらぬスピードでガツガツとビビンバを食べ始めた。今日のビビンバもおいしい。ぜったいおかわりしよう。そんな幸せな気持ちの洪水が起きている心の片すみに、今までに一度も考えたことなかった思いが生まれた。この肉、豚が殺された肉なのかなあ。この卵、ニワトリが子孫を残すために一生けん命産んだ卵なのかなあ。このお肉になった豚は、もつと自由に生きたかったんだろうな。この卵を産んだニワトリは、一生けん命産んだ卵を人間なんかには食べられたくなかったんだろうな。そんな大切な命、ぼくなんかは食べていいのかなあ。手に持っているスプーンが止まった。食欲がなくなった。口の中に残っている肉をはき出してしまいたい気分だ。心の中の洪水は悲しみの洪水に変わっていた。そして、心が何かに強くしめつけられていて苦しかった。

家に帰ったら、その日の夜ごはんは焼き魚だった。また、大切な命を食べてしまうとしようぼりしながら、

ぼくがしぶしぶ食べていると、それに気づいたお母さんが、

「どうしたの。体調悪いの。」

と聞いてきた。だから、ぼくは今日のことを話した。

そうしたら、お母さんが真剣に、

「あのね、食べ物になる動物たちはわたしたちのために死んでくれたんだから、おいしく食べてあげることがその動物たちにとって、幸せなんだよ。」

その時、初めてぼくはあんな考えをもっていた自分がバカだったことに気づいた。そして心の悲しみの洪水はなくなり、しめつけられていたものもほどけていた。次の日の給食はカレーだった。これもぼくの好物だ。けれどカレーも動物たちが殺された料理だ。また食欲がなくなった。でも、お母さんに教えられた言葉を思い出した。この肉たちは、ぼくらの体になるために死んでくれたんだ。だからぼくは、この命に感謝をし動物たちの命の分まで、せいっぱい生きていこう。もう、この前のぼくとはちがう。おいしく、味わって食べてあげよう。その日の給食は今までの中で一番おいしく感じた。食べ終わった後、食缶の中には、まだカレーが残っていた。ぼくは、余っているカレーをお皿によそい、一礼して食べ始めた。